洋１４－２４

「ＫＩＬＬＥＲＳ　キラーズ」　（ショートコメント）　✲✲✲

２０１４（平成２６）年2月１５日鑑賞<テアトル梅田>

監督：モー・ブラザーズ（ティモ・ジャヤント、キモ・スタンボエル）
脚本：ティモ・ジャヤント、牛山拓二
野村（キラーズ）／北村一輝
バユ（フリージャーナリスト）／オカ・アンタラ
久恵（花屋の経営者）／高梨臨
ディナ（バユの別居中の妻）／ルナ・マヤ
みどり（売春婦）／黒川芽以
中年のおやじ（樹海の父親）／でんでん
ダルマ（町の有力者）／レイ・サヘタピー
２０１３年・日本・インドネシア映画・１３８分
配給／日活

◆何度か予告編を見て、北村一輝の主演という興味はあったものの、流す血の量が売り物の映画かと思って敬遠していたが、シネリーブルでの『光にふれる』を観た後、時間的、場所的にちょうどよかったため、テアトル梅田へ。本作の「売り」は日本とインドネシア初の合作映画ということ。ストーリー的には、東京の野村とインドネシアの首都ジャカルタの記者バユがネットを通じて、お互いのキラー（殺人鬼ぶり）を確認していくというものだ。私は『ソウ４』（０７年）（『シネマルーム１８』３５４頁参照）と『テキサス・チェーンソー　ビギニング』（０６年）（『シネマルーム１２』６０頁参照）は観たが、そもそもスプラッター映画はあまり好きではないから、本作に登場するいくつかの残忍なシーンでは思わず目を覆うことも・・・。

◆北村一輝は長身だから、彼が演じる野村のネクタイ・スーツ姿はキマっている。したがって、「あるきっかけ」でお店に花を買いに来た上品そうな紳士、野村と親しく話をするようになったお店の経営者、久恵（高梨臨）は楽しそうだが、なぜ野村は久恵に接触してきたの？それは、久恵が自閉症の弟を連れて自殺しようとした（？）姿を野村が目撃したためだ。実は野村には愛する姉を守ることができなかったという強いトラウマが・・・。たまたま車が急停車してくれたからよかったものの、明らかに久恵は弟だけが車にはねられるように仕向けていたのでは・・・？そう確信した野村は以降、久恵とその弟に対していかなる行動を・・・？

◆東京での出来事や野村の行動は、不可解ながら、まだ理解の範囲内。しかし、ジャカルタでバユ（オカ・アンタラ）が、町の有力者ダルマ（レイ・サヘタピー）とどんないきさつで、どんないざこざがあるのかは、説明不足もあってよくわからない。さらに、バユは愛する娘がいながら、美しい妻ディナ（ルナ・マヤ）と別居中。さらに、ディナには新しいご主人がいるらしいが、そのいざこざが何なのかもよくわからない。ただ、野村がネットに流していた残忍な女の殺しぶりにバユが興味を示したことから、野村はバユを自分と同じ仲間だと思い込むことに・・・。そして、ある日偶然タクシー強盗に巻き込まれたバユは、逆襲し、その凄惨な殺しのシーンをネットで投稿したから、野村のバユへの「キラー」としての共感は確信に・・・。

◆まあ、そんな具合に東京とジャカルタを結ぶキラーぶりが展開していくが、どう見てもその構成ぶりはイマイチ。もっとも、バロック音楽が流れる中での残忍な殺人シーンの連続は、その手の映画が好きな人はお好みかもしれない。しかし、久恵役の高梨臨があまり美人とは思えないうえ、後半に大きな役割を果たす売春婦みどり（黒川芽以）のキャラもイマイチ。さらに野村が東京からジャカルタに飛び、バユやバユの妻子と出会い、さらなるキラーぶりを発揮していくストーリー展開も陳腐な感がある。この作品は、２０１４年度開催、第３０回サンダンス映画祭への正式出品が決まっているそうだが、さて、そこでの評価は・・・？

４（平成２６）年2月１８日記